西宮文学案内
第１回『阪急電車』今津線大検定

日時：2011 年５月８日（日）13 時 30 分から
場所：西宮大学交流センター大講堂
お話：近藤　司（元宝塚映画製作所　美術監督）
聞き手：河内厚郎（文化プロデューサー）

「西宮北口がハリウッドだった時代」

河内：西宮市では、戦前、甲陽園に東亜キネマがあったという話はよく出ます。古い話というのは郷土史なんかでも掘り下げるんですが、もっと近いところが意外に忘れられています。私の実家が、今津に文化住宅というか小さなアパートを持っていたんですが、そこに映画俳優さんが住んでいましてね。それは宝塚映画製作所という会社の俳優さんなんです。その撮影所が両度町にあったわけです。本来、宝塚にあったのですが、昭和 28 年に火事で焼けまして、数年間、西宮北口の両度町にあったわけです。そのときにそこで仕事をなさっていた方を探していたんですが、見つかりまして、今日、お呼びいたしました。
それでは、元宝塚映画製作所で美術を担当なさっていた近藤司さんに出ていただきます。
聞き手を務めさせていただきます。近藤さんは昭和６年のお生まれで、今年 80 歳になられるわけですが、いたってお元気で、まちなかと山を往復する生活をなさっている方です。いま楽屋でお聞きしていましたら、昔、浜美枝さんが出演した『００７は二度死ぬ』、ショーン・コネリーが出ていましたが、あのときの日本側の美術担当をなさったということです。近藤さんが宝塚映画製作所でたくさん美術を担当なさっていらした頃、ちょうど近藤さんと同じ年齢で西宮の撮影所で活躍していた俳優というと、中村扇雀、いまの坂田藤十郎ですね。あの人が宝塚映画製作所の西宮北口の撮影所で知り合ったのが扇千景さんであるということになってくるわけです。
中村扇雀さんのことはよく覚えていらっしゃいますか。
近藤：そうですね、ちょうど扇千景さんとなんかややこしくなったという、ちょうどそのころです。
河内：それは、スタジオのなかでも二人はできているか分かるわけですか。
近藤：あれは分かります。
すぐにね、わっと一緒に二人がさっと消えるからね。だいたい、皆も察しとったわ

けですよ。

河内：それはどこへ行っているんですか。

近藤：あとで聞くと、なんか六甲のホテル、阪急の、そっちへよく行っていたらしいですけどね。

河内：ドライブで。車で行っているわけですね。最初からこういう話になってしまいました。ここだけの話ですが、あのころ扇千景さんは長門裕之さんともうわさがあったと。

近藤：ああ、それは知りません。

河内：それはうちの母親から聞いたんですが。

近藤：そうですか。

河内：近藤さんのお話から入りますが、映画の世界に入られたのはいつですか。

近藤：昭和 26 年です。

河内：宝塚映画製作所。

近藤：はい。

河内：宝塚映画製作所というのは、戦前に阪急電車をつくりました小林一三が昭和 10 年代に一回撮影所をつくっているんですが、そのあと戦争があったりして途絶えてしまって、昭和 26 年に復活したんですね。

近藤：そうです。

河内：そのときに入られたわけですね。

近藤：そのときにちょうど僕も宝塚の歌劇に用事で来ていて、それで撮影所をつくるんだ、入らんかという話になりまして、ああ、面白いなと思ってね。ちょうど映画の一番全盛時代でしたから。それで入社したんですよ。

河内：今日の資料を見ていただきますと、黄色いページのところです。昭和 28 年の 1953 年のところの作品を二つ黒く塗ってありますが、これは宝塚でつくった映画なんです。ところが、昭和 28 年に宝塚の撮影所が火事で焼けたので、『旅はそよ風』という作品は、宝塚でつくり始めて途中で火事が起こって西宮で仕上げた映画で、そのあとはずっと西宮でできた映画です。

近藤：40 作ぐらいは西宮でつくったのは覚えております。

河内：その作品は全部ここに列挙してあります。この西宮北口で撮られていた映画だということで、ちょっと親しみを覚えていただきたいと思います。最初、撮られたのは『元禄水滸伝』ですか。

近藤：宝塚は『元禄水滸伝』です。

河内：昭和 26 年に。

近藤：昭和 26 年に。昭和 28 年に火事が起きましたから。

河内：そのころのことはよく覚えていらっしゃると思いますが。

近藤：そうですね。

河内：例えば、印象に残っている俳優さんとか。

近藤：やっぱり嵐寛寿郎とか大河内傳次郎、途中からは扇雀とか扇千景が入ってきたので、最初やっぱりアラカン、大河内傳次郎、月形龍之助。

河内：これはもうみんな大スターですわね。

近藤：大スターです。当時としてはね。僕なんか若かった 22 歳、23 歳のときですから、あこがれましたよね。

河内：大河内傳次郎という人は時代劇のスターですが、すごい近眼の人で、近くがよく見えていないので、すごい迫力のある殺陣だなという気がしましたけど。非常にするどい目つきの方ですね。

近藤：あの人はすごかったですね。立ち回りなんか。

河内：もう、でもそのころは若くないですよね。

近藤：もういい年じゃないですか。

河内：それでもやっぱり迫力がありましたか。立ち回りというのは。

近藤：やっぱり殺陣師がおりましてね、こうこう切るやつだけやって、舞踊劇みたいなものですね。

河内：もともと新国劇から来られた方なんで、殺陣が派手だったそうですが。アラカンさん、嵐寛寿郎はどんな感じの人でしたか。

近藤：アラカンさんは立ち回りとかそれは流暢でしたね。

河内：すがたのきれいな方で。

近藤：きれいだったです。本当、舞踊劇みたいな。

河内：歌舞伎の出身ですのでね。いま下手に登場なさった小西さん、なんと『阪急電車』に出演しています。エキストラ出演で、ちょっと背が高いのでよく分かると思いますので、ぜひ見ていただきたいと思います。どのへんに出ているかちょっとおっしゃってください。

小西：本当に最後の５分ぐらいに、宝塚駅で登場人物が出ていくところですが、ちょこっと後ろから、一応主役級の間に挟まって。

河内：ということで、今日、進行を手伝っていただきます。
火事で焼けたときは『旅はそよ風』を撮ってらしたわけですね。

近藤：そうです。そのときはちょうど伊豆の方へ皆ロケーションに行きまして、僕はたまたま会社に残っとったんです。そうしたら、人が撮影所が燃えとるぞと、夜中ですからね。

河内：それは漏電でしたかね。

近藤：漏電らしいですわ。

河内：昔、漏電てね、電気が漏れるというのはよくありましたね。

近藤：それで慌ててすぐ行ったら、もう全焼でした。アメリカ博というのがあって、それが終わった跡に道を隔てて映画館、こちら側の端に体育館があったんですよ、大き

な。それを急きょステージにしまして。

河内：昭和 25 年にアメリカ博覧会というのがあったんだそうです。私は昭和 27 年の生まれなんで知らないんですが、エンパイアステートビルディングのミニチュアをつくったりとか、何かアメリカに親しませる博覧会があった跡地が残ったわけですね。

近藤：そうです。

河内：それを急きょスタジオに改造したということで。

近藤：だから、おそらく一ヶ月内にやったと思うんですわ。

河内：早かったんですね。

近藤：ええ。

河内：ついでに言いますと、宝塚の撮影所はちゃんと保険に入っていたので、お金の方は助かったそうです。そうしたら、『旅はそよ風』は、仕上げは西宮で。

近藤：そうです、西宮でやりました。

河内：セットをもう 1 回つくって。

近藤：テイクアウトのセットを再現しましてね。ちょうど大谷友右衛門が第一作で、歌舞伎から東宝宝塚が引き抜きまして、宝塚の契約者として出た作品ですから。

河内：ご存じでしょうか、大谷友右衛門という人は、いま中村雀右衛門といって歌舞伎界の最高のトップの方で、90 歳ですが、文化勲章を取られた女形の方です。昔大谷友右衛門という名で、佐々木小次郎とか映画スターでもあったんです。まだご存命です。日本俳優協会の会長も務められました。その人が出ている、主演ですね、これは。

近藤：そうです。第一作でしたからね、よく覚えています。監督が稲垣浩といって、当時としては日本映画の代表的な監督でしたから。

河内：そうですね。これを見ていますと、実は昭和 31 年に宝塚の撮影所は再現されるので、３年なんですよね、西宮時代は。でも 40 何本撮っているのは。

近藤：42 本です。

河内：だから、すごい量を撮っているわけですね。

近藤：そうですね。あのころは、まだ２本立てというのがはやりましてね。だから、わりと短い 1 時間以内の作品がありまして、そういうものを西宮で撮っていたんです。『快傑鷹』とか『オテナの塔』とかそういうものを西宮で撮ったのを覚えています。

河内：いま映像に出ていますのは、大谷友右衛門、現在の中村雀右衛門で。雀右衛門さんは何度も整形しておられるので。ほかに俳優さんで森繁久彌なんかも。

近藤：森繁久彌とか三船敏郎は、宝塚の専属的な役者ですね。

河内：宝塚になってからですよね。西宮時代といいますと、いま言った大河内傳次郎、嵐寛寿郎、中村扇雀。

近藤：それで宝塚へ帰るときの最後は美空ひばりが。それが一番最後の西宮の作品です。

河内：これはめくっていただきますと黄色いページの一番最後のところ、資料 1 の 10 のと

ころですが、この最後のところの黒く塗っているのは宝塚に戻ってからになりますので、その前の『恋すがた狐御殿』、これが西宮でつくった最後の。

近藤：そうです。一番最後ですね。

河内：美空ひばり、中村扇雀、扇千景、浪花千栄子、山茶花九、これもなかなか豪華なメンバーで撮っていますが。

近藤：当時としては、非常に人気があった。
ひばりがやっぱりすごかったですからね、その当時としては。

河内：そのころもすごい人気ですわね。

近藤：人気でした。

河内：どんな感じの人でした。

近藤：本人はそうでもないんですが、お母さんが大変でしたね。

河内：やっぱりお母さんが来るわけですね。

近藤：これはもう本当に。

河内：そうですか。

近藤：僕の印象では、すごいなという感じのお母さんでした。

河内：ずっとお母さんとべったりでしたのでね、美空ひばりさんは。ちょっと山田五十鈴さんと対照的で、あの人は娘さんを切ってしまうんで、対照的な例だとよくいわれましたが。

近藤：それといまちょっと忘れていましたが、西宮では鶴田浩二が撮っています。

河内：そうですか。

近藤：はい。『女の学校』という。

河内：ありますね。この 44 番ですね。資料１の８に出ていますが。

近藤：これはわりと大作でしてね。

河内：雪村いづみとかが出ていますね。
寿美花代とか。

近藤：水谷。

河内：昔の水谷八重子ですか。

近藤：はい、そうです。昔の方です。

河内：先代の水谷八重子、名女優ですね、これは。そんな人が出ておられたわけですか。
鶴田浩二が高田浩吉と同じように歌うスターといわれましたが、やっぱり歌うんですか。

近藤：いや、歌わないです。

河内：普通の映画ですか。

近藤：本当の。

河内：なるほどね。こうやって見たら、結構、時代劇が多いですね。

近藤：ほとんど時代劇。

河内：このときは時代劇なんですね。

近藤：たまに現代劇を撮ると『今宵ひと夜を』とか、いろいろ東宝の芸術祭参加作品とかいうのをわりと宝塚で撮っていましたね。それから『若い瞳』とかね、やっぱり八千草が多かったんじゃないですかね。

河内：八千草薫さんの主演が多かった。そのときは、八千草さんは、歌劇は辞めておられたんですか。

近藤：そうです。

河内：八千草薫さんはいまもご活躍でね。夫の谷口監督は亡くなられましたが、八千草さんは非常にお元気で。それから懐かしい名前でトニー谷の主演がいっぱいありますね。

近藤：これは「ねちょりんこん」とかね。

河内：「さいざんす」とか、「ねちょりんこん」とか。

近藤：トニー谷、エノケン、それからああいう喜劇の人がわりと多かったですね。

河内：森光子さんが嵐寛寿郎のいとこさんにあたるそうですが、森光子さんは西宮北口に住んでおられましたので。たしか 40 歳ぐらいまでこっちにおられたと思います。

近藤：新芸座におりましたから。

河内：宝塚新芸座という、いまのバウホールのところに歌劇と違う別の劇団がありましたが、そこで出ていましたね。

近藤：そうです。それで、梅田劇場に出ていて、あの『放浪記』ですか。

河内：『放浪記』ね。

近藤：あれにつながっていくわけです。菊田一夫。

河内：菊田一夫さんが見出して東京へ引っ張っていかれたわけですけれども。前半はずっと関西で、西宮にお住まいでしたので。私、家の風呂が駄目になって銭湯へ行ったときに、あ、森光子が来てるわとか誰かが言ったような記憶があるんですね。そういうかすかな記憶があります。ほとんどこの時代のことがもう忘れられているのは、本当に不思議な気がしますが、まずどんなスタジオですか。改造したといっても。

近藤：まったくずっと変わらない、要は、こういうものをただ防音装置しただけで、下は土でしたからね、埃で大変でした。それだけは覚えています。体育館の方は中２階になっていて、そこは小道具とかそういうものを置いて物置にして、その中で撮影していくような感じでしたけれどね。

河内：いまみたいにコンピューターもありませんから、美術はもう全部手づくり。

近藤：全部手づくりです。

河内：何か苦労話とかありませんか。

近藤：それほどのことはないですけどね。

河内：いろんなことがあったと思いますが。

近藤：だけれど、室内に関するものはステージしか撮れなかったですからね。＝覆い＝が

足らないもんだから、全部ステージで建てて撮るもんだから。それからロケーションに行って、太陽光線だけはロケーションになるわけです。

河内：例えば、スタジオ以外で撮った場所とか何か覚えていますか。

近藤：このあたりでいうと、いまの報徳学園のところがずっと土手になっていて、松林がずっと並んでいたんですよ。琵琶湖に行くのは大変だから、ほとんど時代劇というといまの報徳学園のところで撮っていました。

河内：武庫川の河原の手前ですか。

近藤：そうです。だから河原の方から撮って、松林がずっと並んでいる。それを馬がだあっと、鞍馬天狗が馬で走るところなんかは全部川の方から撮って、道はアスファルトですからね。当時は車が少なかったから、10 分間ぐらい止めておいても大したことないです。

河内：そうですか。ほかにビルとかなかったわけですね。

近藤：ないです。途中からどんどん報徳学園がビルのようになって、使えなくなったんですけどね。だから、馬で走っているところのアラカンなんかのは全部、そのころは三つのトラックの上にいわゆるたてがみだけをつくって、それにアラカンが乗るというような。走っているわけですね、こうやって。僕はちょうど係りだから、それを首のところから下からこうやってあおいで、たてがみがこうひゅうひゅう、そんなん覚えていますが。そうしたら、アラカンが上から「大丈夫か」と。全部、馬の走るときはそんなんで、車の上で撮っていたのは覚えています。

松林がずっと仁川の川のところまでありましたので、延々と撮れるわけですね。

河内：ちょっといまではね、なかなか撮るのは難しいと思いますね。

近藤：ちょうど甲武橋からずっと宝塚に向かって、それはほとんどの時代劇が全部そこで撮っていたんじゃないかなと思います。

河内：そうですか。甲山なんかは使わなかったですか。

近藤：ああ、使いますよ。

使うけれども、ほとんど芝居はちょうど報徳学園のいま運動場かな、あのへんが全部松林だったので、そこに何かの小屋を建てたりね、施設を建てて、そこを覆って撮ったのを覚えていますがね。

河内：これを見るとミヤコ蝶々の『蝶々雄二の弥次喜多道中』というのがありますね。これも時代劇ですね、当然。

近藤：そうです。あのころは南都雄二と蝶々、喜味こいしとか、ああいう人がよく来ていましたね。

河内：両度町にスタジオがあったわけですが、やっぱりその周りで食事をしたり、俳優さんがうろうろしていたわけですか。

近藤：それは、ほとんど俳優は出ていかれないんですね。なんかあのへんの人がいっぱい来るもんだから。スタッフは全部駅前、そのころの西宮球場との間にちょうど飲食

店があって。

河内：ありましたね。

近藤：そこへ飯を食いに行ったのを覚えていますけどね。

河内：普段、撮影所は一般市民には公開していなかった。

近藤：していなかったです。

河内：私ね、1回だけ見たことあるんですよ。何か特別に入れてもらって、母親と一緒に。

近藤：ああ、そうですか。

河内：上からじょうろで水をまいて雨やとか。こんな素朴なものかと思ったんです。

近藤：でもね、よくわれわれも飯を食べているときに、おばちゃん連中が見せてほしいから、おいでと言ってね。それはよく案内して見せましたけれどね。ちょっと飯が安くなったりね。

河内：どうですか、西宮北口の撮影所を覚えている方はいらっしゃいますか。もしいらっしゃったら挙手を。3人ぐらい。こんなもんですかね。私は58歳でも覚えていますもんね。そんなにむちゃくちゃ昔ということでもないような気がしますが。ほんと忘れられてしまうんですね。ちょっと映画の話に戻りますが、そのあともずっと宝塚映画制作所に在籍されていたわけですね。

近藤：そうです。

河内：昭和31年に宝塚の撮影所が復活して、立派なスタジオでしたね。

近藤：そうです、もう東洋一といわれてね。

河内：屋内スタジオですが。

近藤：すごいスタジオができまして。

河内：そのころが映画の全盛時代ですか。

近藤：全盛時代ですね。やっぱり昭和33年が映画のピークといいますね。ちょうどそのころ宝塚へ通っていたときですから。

河内：それで森繁久彌とか。

近藤：そうです、森繁が多かったですね。

河内：高島忠夫さんが新人で入られた。最近亡くなられた頭師孝雄さんとかですね、いろんな方がいらっしゃったわけですが。昭和30年代後半から昭和40年代でだんだん。

近藤：そうですね。昭和33年ぐらいからテレビ映画に変わりまして、テレビ映画を宝塚はずいぶん撮っていると思います。

河内：これは関西テレビで放映していたんですね。

近藤：関西テレビとか毎日放送、読売テレビ、それからフジテレビのお昼の番組の帯ドラマというのがあったんです。

河内：あれも宝塚で撮ったんですか。

近藤：宝塚がわりと多かったですね。

河内：そうですか。余談ですが、東宝という会社がありますが、有名な。東京宝塚を縮め

た言葉なんですが、それを意外と知らない人がいるんですね。それを東京の方では五社協定というのがあって、松竹、東宝、それから大映、東映、日活、この五社で協定を結んでいて引き抜かないようにしていたんですね。

近藤：そうなんです。それで結局、小津安二郎とか木下恵介とか、そういう監督が東宝で撮れないものだから、全部、五社協定にない宝塚へ来て撮るものだから、いい大作というか、そういうものが宝塚は多かったのを覚えています。それで、やっぱりあのころは小津さんとかは一番大変でしたからね。

河内：大監督ですからね。五社協定に宝塚映画製作所は入っていなかったので、逆に誰でも出られたということで。

近藤：だから役者も全部、例えば、若尾文子とか、鶴田浩二とか、全部よその会社でも宝塚映画製作所では撮れるわけですね。

河内：小津安二郎がつくりましたのは『小早川家の秋』ですね。

近藤：そうですね。

河内：司葉子を呼んできて撮影されるわけですね。

近藤：そうです。東宝でしたからね、司葉子は。

河内：小津さんは松竹の監督なんだけれども、東宝と一緒にやれたという、宝塚映画製作所はそういう意味で非常に自由で面白いところだったわけです。何か藤本義一さんが。

近藤：藤本義一さんは最初の映画のきっかけが宝塚映画製作所で始まったわけです。

河内：勤めていた、仕事していたわけですね。

近藤：仕事していたわけです。うちの文芸部というのがありまして、そこに最初に学校出てすぐかな、入社してきたのを覚えています。

河内：そうすると、シナリオを書いていたわけですね。

近藤：ええ。主に佐伯幸三という監督がいたんだけれど、そういう人に藤本さんは付いてずっとやっていました。

河内：助手のような感じで。助監督とは助手ですからね。

近藤：うちの文芸部の一員ですからね。

河内：いまも藤本さんは今津線の沿線にお住まいですが。要するに、宝塚映画製作所で仕事を始められたということです。宝塚映画製作所にかかわった人というと、ほかにどんな人がいますか。岡崎宏三というカメラマン。

近藤：それはカメラマンですね。
それもほとんど宝塚ですね。

河内：有名なカメラマンですね。亡くなりましたが、最近。

近藤：われわれで、僕なんかと一緒にね、僕は美術でカメラが岡崎宏三という、だいたいそういうパターンで、照明の下村いうのがおりまして、照明をやって。

河内：さっきちらっと言われました、『００７は二度死ぬ』。それはどういう、それは宝塚

に関係ない。

近藤：『００７は二度死ぬ』は水谷浩という日本でトップクラスのデザイナーがいたんですよ。それが話を受けて、ちょっとおまえやってくれということになって電話がかかってきて。

河内：それはあの映画のどのへんですか。

近藤：撮影は浜美枝が主演でしたね。九州でロケセットをつくりまして、桟橋ね。『００７は二度死ぬ』のいわゆるジェームズ・ボンドが降りるところとか、みんなそこで撮って、そのときに一番びっくりしたのが、ジェームズ・ボンドの嫁さんが短いスカートで来たんですよ。わあ、すごいと。われわれ若いときですからね、皆が行くわけですよ。

河内：一番印象が強いのはそれですか。

近藤：それがね、夏ごろかな、撮影していたのは。それが夏ごろになると日本中にミニスカートがいっぺんにはやったんですよね。

河内：ツイッギーというのが昔イギリスから来て、その前くらいかな。

近藤：だから、いわゆるひざ下何寸というスカートがいっぺんになくなってね。それは毎日、毎日ね、楽しんだもんですよ。

河内：ショーン・コネリーの奥さんということですか。

近藤：そうです、奥さんです。

河内：目のやり場に困ったと。そういうものですか。

近藤：１カ月ぐらい楽しみました。

河内：それは外部でやった仕事になるわけですか。

近藤：いや。

河内：ではないんですか。会社からですか。

近藤：一応、そういう道具とかは宝塚の撮影所が受けました。

河内：そうですか。

近藤：だから、いわゆる美術的な金は宝塚映画製作所から出すようにして、いくらかは口銭が入るような仕組みになっています。

河内：西宮時代にかかわらず、宝塚映画でもっとも思い出深い作品というと、どんなものですか。

近藤：思い出深いというのは、何でしょうね。やっぱり加山雄三やなんかで撮った黒沢さんの『姿三四郎』とか。

河内：『姿三四郎』、あれは宝塚で撮ったんですね。

近藤：あれなんかは、みんなあそこの白水峡という宝塚の上の山を全部雪景色にしたりね。

河内：蓬莱峡の近くに白水峡がありますが、あそこで撮ったそうです。

近藤：そこを雪景色にして、その下で岡田英次とか佐藤とか、そういう者で立ち回りやってね。編集は黒沢明でした。

河内：これはまた厳しいんでしょうね。これはもう。

近藤：ええ。だから、全部そのときに黒沢さんに、誰やこれをつくったのはということになって、それから黒沢さんの仕事をやるように。

河内：気に入られたわけですね。

近藤：ええ。アメリカ映画の『トラ・トラ・トラ！』なんかの軍艦やなんかは全部、九州で僕がつくりました。それは日本映画が当時だいたい 800 万円から２千万円ぐらいで映画が１本できるときに、そういう軍艦をつくる美術費が４億円ぐらいですからね、使えたんですよ。自分の思う通りにね。奥村組という建築会社。

河内：大阪にありますね。

近藤：そこに請け負ってもらって、大工さんが何百人かずっと毎日入ってね。何カ月もかかって。

河内：ぜいたくですね。

近藤：４億円使えるからね。金をどないして使おういうぐらい。日本映画だったら、こうしたら安い、こうしたら安いといってつくっていたのが、どうやって金を使おうかというのをやらせてもらって。

河内：あのうるさい黒沢監督が気に入ったということは。

近藤：『姿三四郎』のセットとか雪景色、そういうすごいことを考えるやつやということで非常にね。手前味噌ですが。

河内：それはテクニックだけではなくて、アイデアが要るんでしょうね。

近藤：そういうことですね。

河内：加山雄三さんの若大将シリーズを宝塚映画製作所でも何本か撮っているので、こっちでロケしているのがあるんですが。黒沢監督というと伝説的な人物ですが。どんな感じの人ですか。そばで仕事なさって。

近藤：とにかくでかいのと。

河内：でかい。

近藤：それとね、やっぱり言うことが普通の監督とちょっと違う。やっぱり天の声みたいなところが非常にありましたね。だからやっぱり付いていくのが大変で、そんな思い出が非常にありますわ。

河内：小津さんもそこでご覧になりましたか。

近藤：ええ。小津さんは毎日ずっと部屋でしゃべりながら、あくる日はどうしようかという。あの人は非常に小道具とか湯呑とか、ああいうものに非常に凝る人ですから。どんな色の茶器がどうやとかね、やっぱりアイデアが多かったです。

河内：木下恵介さんも来ていますね。

近藤：木下さんは、普段はちょっとこう、ナヨッとしているけれど、映画の撮影が始まるとすごく厳しい人でした。うちでは『なつかしき笛や太鼓』を。

河内：そうすると、かなり一流の監督さんとずいぶん仕事をなさった。

近藤：そうですね。
河内：それは大きいですね。
近藤：あとは成瀬巳喜男という監督がいました。
河内：成瀬巳喜男監督。
近藤：高峰秀子で『放浪記』というのをやっていました。
河内：宝塚映画製作所で『放浪記』、芝居の方は森光子さんですが、映画の方は高峰秀子さんが宝塚で撮られましたね。本当にいい映画だと思います。
近藤：やっぱり女優さんのなかでは、僕の感じですが、すごく頭のいい人でした。
河内：そうですか。
近藤：高峰三枝子さんも宝塚へよく来たんです。
どっちも頭がいいなという。監督が注文を付けてもね、両高峰が、とにかくすぐ分かっちゃうんですね。だから、すごいなと思ってね。ほかの人はどうしても手取り足取り監督がやるけれど、高峰さんは、本当に両高峰ですが。
河内：かなり早くから映画界にいますよね、あの人は。子どものときからね。
近藤：そうですね。子役でやっているから。
河内：それは分かっているんでしょうね。
近藤：それだから、のみ込みが早いというかね。
河内：つい最近、亡くなられたばっかりですが、そういうお名前がどんどん出てきますが。そうすると映画のいい時代を経験されて良かったですね、本当に。
近藤：本当に良かったです。
河内：実はね、まったくこういう席に出てこられない方で、今日初めてなんです。
近藤：そうです。
河内：初めて公開の席でこういう話を。無理やり引っ張り出したんですが。しかも、宝塚映画製作所の OB さんはたくさんいらっしゃいますが、西宮時代から覚えている人となると、もう本当に少なくなっていますので、今日は無理にお呼びしたわけです。
近藤：全部つまらない話で悪いけれど。自分の覚えている範囲の記憶でね。
河内：宝塚で美空ひばりさんのころに、ミュージカル映画みたいな映画がありましたよね。音楽映画というかミュージカル。
近藤：わりと瑞穂春海とかいわゆるミュージカルの監督が多かったから。ひばりとかいづみとかの三人娘がいましたね。
河内：江利チエミと三人娘。
近藤：あれを撮る映画というのはわりと宝塚が多かったですね。
河内：これも宝塚映画製作所のスタジオで撮るわけですか。
近藤：そうです。
河内：どうですか。音楽というのは、そのときは誰か演奏しているんですか。
近藤：あとから入れたり、それはいろいろです。音楽を流しながら芝居したり、あとから

音楽入れたり。最初の方はロケーションに行くといまみたいに機械が良くないから、全部アフレコといってね、全部撮ってきたものを画面に映しながら、それに合わせて役者がしゃべるわけです。そういう時代がわりと長かったです。

河内：あとから入れていく。

近藤：声はみなあとからでね。ステージの中はあくまでシンクロで撮りますが。それ以外は全部アフレコです。こういう画面に映しながら。口を合わすのが、相当大変で。すぐ合わせる人と、遅くてタイミングが合わない人と。

河内：『ジャズ娘乾杯』は、雪村いづみさんですね。

近藤：ええ。

河内：それと江利チエミさんですね。

近藤：三人娘がわりと多かったですね。

河内：朝丘雪路さんなんかも出ているのがありますね。

近藤：朝丘雪路は最初の方ですね。

河内：そうですか。雪村いづみさんはまだ存命でしたか。ひばりさんとチエミさんは亡くなってしまいましたけれど。三人娘もいろいろありましたね。私らはね、園まりとか伊藤ゆかりの時代です。森昌子、山口百恵という人もいれば、いろいろですが。

近藤：その一つ前ですね。

河内：なかにはキャンディーズという人もいますが。ワイドショーを見ていたら、私よりちょっと下の 54 歳、55 歳の会社で部長ぐらいをやっている連中がわんわん泣いて、すーちゃんありがとうとか、そんなん恥ずかしくないのかな。もういい年しているのにと思いましたが。アイドルというのはそういうもので。三人娘とかのファンがスタジオを押しかけて来たりとかは。

近藤：守衛所のところでよくもめていました。わいわいと。

河内：それはやっぱりサインをねだったりとか、いろいろと。

近藤：だいたいそうですね。

河内：だいたい追い返したんですか。

近藤：追い返すというか、そうですね。

河内：ひばりさんなんかは、ファンが愛情のあまり塩酸をかけたりした事件がありましたね。

近藤：それと、宝塚の場合というのは宣伝して撮っていないから、わりと知らない人が。だから、最近でも話をしていても、ええ、宝塚に来とったんかとかね。そういう話が多いですから、その当時としては、いまみたいに何を撮ろうと前から言うのではなくて、できたもので宣伝するような時代ですから。

河内：そのころは複数の作品を同時に撮っているということはあったんですか。

近藤：たまにありますよ。だけれど、宝塚はステージが限られているから、わりと少なかったです。

河内：一つが終わったらすぐまた次。

近藤：そうです。僕なんかの美術の仕事は、終わりが近づくと次の作品の打ち合わせで東京へ行ったりなんかしてやっておりましたんでね、次から次へ当時は入っていました。

河内：近藤さんは、もともとそういう世界に入られたのは。美術学校出たとか、そういうのではなくて。

近藤：絵を描くのが好きなだけでね。それがたまたま美術の仕事を始めるようになって。それと時代考証というんですか、昭和の初期や明治とか、それをずっと調べながらデザインするのが非常に楽しくなってきて。だから、春団治みたいに昭和初期の話とか。

河内：桂春団治の映画、森繁久彌で撮った、これは近藤さんが法善寺横丁を再現されたそうです。そのへんの話を。

近藤：あの法善寺横丁に関しては、昔の二鶴というところの店の主人を探してきて、そこで写真を見せてもらったり、話を聞きながら表通りとか、大阪に一人郷土史家がいまして、法善寺のなかのことは全部その人が教えてくれました。

河内：牧村史陽。

近藤：そうです。

河内：牧村史陽って有名な人がいましたね。

近藤：その人がほとんどそういう資料をくれて。

河内：あの映画は昭和 30 年代ですが、舞台は大正から昭和の初めぐらいですね。

近藤：そうです。昭和初期です。

河内：昭和初期の法善寺横丁をもう一回調べて。

近藤：そうです。結構、面白くて。だから、いまでいえば建築デザイナーみたいなもんですね。ただ昔のやつを再現するという。

河内：ミナミは戦争で焼けていますでしょう。全然違ってしまっているわけでしょう、実際には。

近藤：それを１軒、１軒ね、そういうふうに調べましてつくっていくわけです。もちろん映画ですから、ある程度安くするためにといえばそうしますが。夫婦善哉であるとか二鶴とかいう一般的に有名なやつはそのまま再現するようにして。

河内：これは宝塚映画製作所のなかでも評判の高い映画で、成功した作品ですね。

近藤：そうです。ヒット作ですね。

河内：『世にも面白い男の一生 桂春団治』という森繁久彌の映画です。昭和 30 年前後の西宮北口の思い出と重なってきますが。何か小西さんの方でございませんか。小西さんは撮影所があったのは覚えていますか。

小西：はい、一応覚えているというか、私も昭和 28 年というと５歳で、５歳から８歳のころにあったことになっています。そのころはちょうど家が商売をしていたので、オ

ート三輪の隣に乗せてもらって西宮北口の市場へ配達をした帰りとか、あのなかで映画撮っているねんでとかいう話で、見たいなと思いながらも、ただあの建物があったことしか覚えていないですね。ということで、今日のお話は本当に楽しくいま聞かせていただいております。

河内：何かございますでしょうか。よろしいですか。

会場：旧甲子園ホテルが舞台になった作品はあるんですか。

河内：甲子園ホテルという建物は、武庫川女子大学にいま残っていますが、あそこで何かロケはありましたか。

近藤：あそこはないです。

河内：ないですか。

近藤：ないけれども、われわれにしたら非常に邪魔になってね、時代劇の。

河内：洋風のホテルですからね、これは。

近藤：それでずいぶん困ったのを覚えています。

河内：なるほど。

近藤：だから、木の枝をつたわせたり、何かしながらごまかしました。

河内：戦前、原節子が若いときに出た映画で甲子園ホテルを舞台にしたのがあるんです。ドイツとの合作で日独合作映画ですが、あんな立派な建物のわりにはあんまり使われていませんね、ロケに。宝塚映画のタイプが違ったんでしょうね。

近藤：そうです。とにかく僕は邪魔になったのしか覚えていないです。

河内：時代劇にはちょっとね、向きませんわね。

会場：門戸厄神さんの参道で鞍馬天狗を撮ったはずなんです。これは昭和 30 年のこれですか。僕は昭和 28 年か昭和 29 年ぐらいかなと思っていました。

近藤：あれは僕もあんまり覚えていないんですが、甲東園のちょっと上の方に坂道がありまして、そこに『浄瑠璃坂の決闘』という映画を撮るので、塀をつくったりなんかしていて夜間に撮影した、多分その話だと思います。それはアラカンの映画です。

会場：アラカンの映画ですか。僕があとで見に行ったんですが、鞍馬天狗だったと思うんですが。

河内：それは鞍馬天狗です。

近藤：鞍馬天狗だと思います。

会場：松島トモ子が何か。

河内：杉作で。

近藤：杉作やったね。

河内：そのとき甲東園はまだ家が建て込んでいなかったんですか。

近藤：まだそういう時代劇の道がずっとあって、普通の家があるんだけれどそういうふうに。

河内：なんとか撮れる。

近藤：ごまかせるという。

河内：そうですか。関西学院大学が写ってしまうとあきませんわね。モダンな建物ですからね。

近藤：塀をつくったりなんかして、あそこの壁づたいに。そんなようなことを覚えていますけど。

河内：私が見にいったのは、どうも白井権八みたいなんですよ。そのロケをちょっと見て、岡田茉利子さんとか扇千景さんとか見ました。当時、中村扇雀が人気があった時代ですのでね。西宮球場から、いまの西宮ガーデンズから真っすぐ西へ行く道がありますね。線路を渡ってずっと行く道です。津門川を渡って左右にスタジオがあったんですね。

近藤：そうです。

河内：大きいですね、わりとね。

近藤：だから、向こうに民家があって、道が一本、踏切からずっと下りてきた道とその横です。ですから、ちょうど線路の電車の音が邪魔になるぐらいのところにありました。

河内：今津線のね。

近藤：いわゆる線路から真っすぐ西へ行ったあの道の左側が体育館でしたからね。

河内：博覧会の体育館。

近藤：そうです。

河内：その南側に昔、屠殺場がありましたよね。あとは食肉センターになっていますが。

近藤：だから、夜になると、僕はあまり飲まなかったけれど、大工さんやなんかはずっとそこへどぶ酒というのを買いにいって、１升、２升飲んでいたのを覚えています。

河内：それはスタジオで。

近藤：スタジオで。

河内：スタジオで飲んでいるんですか。

近藤：いわゆる映画が終わってあとの。

河内：撮影所と球場の間に若干、食堂とかありましたよね。

近藤：食堂は駅前でした。

映画館がありましてね。あれは途中でスケート場か何かになりましたけど。

河内：ありましたね、東宝系の映画館ですね、ありましたね。そういえば球場の前の飲食街は、つい最近まで終戦のまま残っていたような感じのところがありましたね。最近、さすがにがらっと変わりましたが。それから、いま言いました道を真っすぐ西へ行くと、行き止まりの森下町にダイエーの本社がひところありましたね。たしかそういう時代があったと思いますけれど。西宮北口はいま思うといろんなものがあったところなんですが、金が投下されたのにもかかわらず、あんまり根付かず、いつの間にかどんどん変わっていったんですが。いまはさすがに西宮北口を行政さん

も投資していますが。宝塚映画製作所の話に戻ります。ちょっと残念ですね、撮影所がなくなってしまって。

近藤：そうですね。

河内：震災のころまで、テレビ映画を撮っていたんですね。

近藤：そうです。だから、たまたま僕はそのときに宝塚映画製作所の専務していたんですが。

河内：専務。

近藤：ええ。震災で、いわゆるテレビ映画とかそういうものが、全部宣伝がストップしたので、宝塚へ来る作品がみんななくなってきたんですね。そのころから会社もおかしくなり出して。僕は地震のあとに会社を辞めました。

河内：撮影所は最後の方はイベントホールになっていましたね。木下大サーカスが来たりとか。

近藤：サーカスやったり。

河内：イベント場になっていましたが。それでも撮影所の建物は残っていたんですが、2003年か2004年ぐらいに。

近藤：そうですね。

河内：数年前に完全に閉鎖で、現在関西学院大学の小学校になっています。えらい無常を感じますが、関学の小学校です。

近藤：マンションとかね。

河内：宝塚映画製作所は宝塚映像という名前で、会社はまだ残っております。それと直接関係はありませんが、東宝が『阪急電車』を今度撮られてわりあいヒットしているようですが。アイデア商品なんで、やっぱりまた地元で映画をつくりたいという夢は市民としては失いたくないので、なんとかしたいなと思うんですが。どうですか。いまでもやっぱり映画をつくりたいと思われますか。

近藤：もう思わないです。

河内：そうですか。

近藤：いまちょっと減りましたが、デザインでいろいろ頼まれますからね。そういうアドバイスとか自分でやったり、まだ80歳ですから。

河内：かくしゃくとしていらっしゃいますし、ぜひもう一度、今津線沿線で復活したりとか。というわけで、このあと小西さんにお話しいただきますが、今津山中町にありましたマーキュリーレコードという、首都圏以外では唯一のメジャーなレコード会社があったわけです。私が好きだった西田佐知子とか、そういう人たちがレコードを吹き込んだんです。それが今津にあり、撮影所が宝塚にあり、一時西宮にあり、それからもちろん歌劇がありますし、それから宝塚新芸座とかそういうものがあったわけで、今津線は本当に芸能人が多かったので、だから森光子とかそういった人が住んでいたんです。なにもそんなに100年、200年前の話をしているんじゃない

んです。本当に 30 年、40 年前の話です。そういう意味では、近い時代をもっと掘り起こしてみたいと思います。お時間が来てしまいました。ご質問がないようでしたら、近藤さん、今日は手始めでして、また機会を持ちます。

近藤：つまらない話でどうもすみませんでした。

河内：ありがとうございました。それでは、５分休憩をいただきまして、このあと小西さんにバトンタッチいたします。

「マーキュリーレコード調査報告」

講　師：小西巧治（西宮芦屋研究所員）

小西：それでは、次のマーキュリーレコードのお話を始めさせていただきたいと思います。先ほどちょっと河内先生の方から話がありましたが、このマーキュリーレコードですが、私も実はこれもうろ覚えでして、それこそ今津のあたりを歩いていると藤島桓夫が歩いていたとか、松山恵子がいたよとか話は聞いていますが、私もこの場所がどうかというのは分かりませんでした。河内先生の方から一度調べてほしいと言われて、どんな手がかりで調べていいのか非常に悩んでいたんですが、やはり何人かの方からこんな話があるよとアドバイスをいただいたんですが、一番参考になったのが『神戸新聞』の姫路支社長されている方が、いまから 10 年ぐらい前に『関西発レコード 120 年史』という非常に膨大な記事を長期間にわたって掲載されて、その山崎さんという方にお会いできてお話が聞けたことと、この山崎さんからマーキュリーレコードの最後の代表取締役をされていた福田さんという方、いま芦屋にいらっしゃるんですが、この二人の方からのお話が非常に参考になりました。私の持ち時間は 25 分ぐらいですか、これではもったいないぐらいの実はいっぱいねたをいただきました。そういうことで非常に端折った説明になります。私、西宮芦屋研究所という非常に怪しい名前ですが、阪神間文化研究者集団ということで、こういうようなことを日夜いろいろとごちゃごちゃやっています。この続きなり、今日お伝えできなかったことは、西宮芦屋研究所といってグーグルでもヤフーでも検索していただくと出てきますので、そこでマーキュリーレコードの話も今日お話できなかったことも含めまして書いております。パソコンをなさる方は、ぜひともこれで検索していただけたらと思います。

それでは、話を始めさせていただきます。まずは日本レコード年表ということで、音を何かに記録するというのは、これもエジソンでございまして、1877 年に円筒型の蓄音器を発明しました。これだけでは普及しなかったんですが、そのあとに平板式、いまのレコードの始まりになりますグラモフォンというものをエミール・ベルリナーが発明しました。この２年後に日本では鹿鳴館で実演がありました。

それからもう少しあとに日米蓄音機製造という会社ができ、さらに明治 43 年には日本コロンビアの前身ができました。明治 44 年、ほとんど明治の終わりのころに、やはり港町神戸ですね、ここにはいろんな情報が入ってきますので、ここで時枝商店のミカドレコードができました。それからさらに 10 数年たって、今津の上野町、ここに内外蓄音器商会というのができましたというのが、実は西宮にレコード会社ができた最初なんです。それで、今度、マーキュリーレコードの前身はタイヘイレコードというのですが、これが先ほど言いました上野町にできたあとに、今度は 1930 年に太平蓄音器が昭和になってから株式会社化されました。その 5 年後に関西の老舗レコード会社日東蓄音器を吸収して、大日本蓄音器になりました。これでだんだん大きくなっていったわけです。

ここで、ちょっと皆さんもあれっと思うようなお話が一つあります。昭和 16 年に森光子がここでデビュー作『白衣の勇士を送る歌』を実はレコーディングしています。しかし、あとで申し上げますが、これは世に出なかったんです。これはちょっとここだけにしておきます。そのあと昭和 17 年に「国家総動員法」ということで、キングレコードの親会社、大日本雄辯会、後の講談社に強制的に買収されました。ということでキングレコードの西宮工場になりました。ここで何をしていたかというと、レコードをつくらずに航空機部品をつくっていたらしいですが、幸いなことに戦争には巻き込まれずに、レコードの原盤が残りました。これが非常にこの会社の戦後の発展の起爆剤になりました。

ということで、写真で見るマーキュリーの歴史ということで、最初、上野町だったんですが、昭和 8 年に山中町に新工場ができました。その次が、当時の宣伝カーで、レコードを宣伝して回ったときの写真です。マーキュリーレコードがあった場所はどこかということですが、皆さんご存知のように、いま西宮協立脳神経外科病院がありますね。それとその横にダイエーのグルメシティーがありますが、その南側にホンダのパーツの会社があります。そこがほぼマーキュリーの場所だったということです。実は、この地図は西宮流という地域ポータルサイトがあるのですが、今日も 20 人の方限定で西宮流の方による『阪急電車』のロケ地巡りがありますが、そこに出されています今津っ子さんという本当に今津のことについては非常に詳しく研究されている方からちょっとお借りして、その地図を使わせていただいています。そういうことで、この場所にあったと、いまは跡形もありませんが、ここが戦後どのようになったかですが、キングレコードと一緒になったと申し上げましたが、この尾久というのは上野からちょっと北の方で、東京の荒川区ですか、尾久という場所があります。ここの工場が焼けたので、西宮の工場が主力工場になったんです。

ということは、宝塚の先ほどの撮影所の話も火災が原因だったということですが、これもそういうことでちょっとかたちは違いますが、このために西宮の工場が非常に忙しくなったということです。そのあとに非常に面白いことがありまして、親会

社の講談社が物品税を滞納したということで、国税庁が差し押さえたと。これで競売になって、戦前、このレコード会社の経営に携わっておられて石井廣治さん、これはどなただと思われますか。石井一さんとか一二さんとかいう国会議員さんがおられますね。あの方たちのお父さんなんですね。この方がこれを買い戻したということになります。ここで、タイヘイ音響という名前に変えました。それで、ここで新譜の制作をしました。ただし、先ほど申し上げましたように、戦災に遭わなかったので昔のレコードが残っていたんですね。これをぼんぼんぼんぼん刷るだけで、戦後、音楽に飢えていた人たちにレコードがぼんぼん売れたわけですね。

さらにそのあとここでアメリカのマーキュリーレコードと独占契約をしたということで、ここで多分皆さんもご存じの『テネシー・ワルツ』、これが大ヒットしたんです。ですから、アメリカから原盤をもらって、それをここでぼんぼんぼんぼん刷っていったわけです。そういう時代があったということですね。そのあとこのためにマーキュリーという名前が売れ始めたので、会社名も日本マーキュリー株式会社と名前を変えました。ここで皆さんご存知の東海林太郎、瀬川伸というのは瀬川英子のお父さんですが、岡晴夫、田端義夫、この人たちは実は移籍組なんですね。もうすでに歌手として地位を確立していた人なんです。この人たちに加えて、ここから新人ですが、藤島桓夫、野村雪子、松山恵子、西田佐知子という人たちを新人歌手として育てたということです。この西田佐智子は、最初はこの漢字を使っていましたが、そのあといったん浪花けい子という名前になりまして、さらに西田佐知子にしてレコード会社も移ってブレイクしたという人です。それからあまり知られていませんが、当時の代表取締役の福田さんからお聞きしたんですが、奥村チヨも童謡歌手としてちょこちょこ顔を出していたという話もうかがいました。ここでは特にそれほど稼いではいなかったらしいです。

それで、タイヘイという名前ですが、意外なことですが、これも今津っ子さんに教えてもらったんですが、太平トリオというのが昔ありまして、浪曲漫才ですが、これが実はこのタイヘイレコードのタイヘイという名前を継いでいるんですね。実はすぐの弟子がレッツゴー三匹、ザ・ぼんちで、太平トリオの愛弟子というか直の弟子です。さらに孫弟子が太平サブロー・シロー、ジミー大西。最近ではひ孫弟子のかつみ・さゆりという、これがまだこのレコード会社なんですが、レコード会社といっても当時は浪花節があり、長唄があり、義太夫がありですから、そういう人たちがここへ来ていたんです。なかには芸者さんが来て歌を歌っていたと。これはちょっとあとで面白い話につながりますが。こんなことも一つございます。

パティ・ペイジの『テネシー・ワルツ』ですが、ちょっとこれをお聞きいただきたいと思います。当時のレコードでかなり古いものです。

（音楽）

この歌はかなりの方が、胸きゅんという感じで聴かれているんじゃないかと思います。これを実は日本人として歌ったのが、先ほどのジャズ娘、江利チエミさんだったということです。もちろん江利チエミさんはレコード会社が違いますから、ここでは歌っていないんですが、ちょうど本当にマーキュリーから１キロメートルちょっとしか離れていませんよね、そこの両度町からは。１キロメートル、もうちょっとありますかね。1.5 キロメートルかそれぐらいですが。ですから、いまでいえば東京の六本木のスタジオで歌を吹き込んで、さらに赤坂で撮影したというような雰囲気、ちょっと今津と西宮北口ということで全然違いますが、言ってみればそんな関係だったんですね、この二つは。

マーキュリーは非常に日本のジャズの普及に貢献しているというか、ジャズ・アンド・フィルハーモニックということで、アメリカからジャズメンを呼んで、当時のラジオ東京、いまの TBS テレビの前身ですが、こことキャンペーンを組んでということもやりました。

今度は隆盛をつくった作曲家ということで、遠藤実。遠藤実というのは本名ですが、もともと売れない時代は星幸男という名前だったんです。これは作曲家としての芸名なんですが、星幸男というと、なんか橋幸夫があとからこの名前を取ったんじゃないかと思いますが、橋幸夫は実は本名なんですよ。ですから、星幸男というのは星幸男であったというだけで、その星幸男が売れなくて、遠藤実に戻ったんです。そして初めて作った歌が『お月さん今晩わ』という歌です。藤島桓夫と一緒につくりましたが、これがヒットしたんです。

（音楽）

この歌はかなりの方が覚えていらっしゃると思いますが、実は藤島桓夫はご覧のように結構頭が大きい方なんです。歌がすごくうまいのですが、どうもなかなかデビューできなかったと。そういうことは歌手でもやはり見栄えというのが大事で、この歌を出すときに非常に面白い話がありまして、今津の駅前の散髪屋さんにマネージャーが連れていって、どうにかしてこの頭が小さく見えるように刈ってほしいというように頼んで、散髪屋さんが苦労してやったあとで、ジャケットをつくって歌のデビューをさせたと。遠藤実の歌も良かったわけですが、そんなことも功を奏して、このへんからだんだんブレイクしていきました。

ここまではいろんなところに書いてありますが、これからする話は多分本当にごくわずかな人しかご存知ない話なんです。この藤島桓夫のマネジャーを誰がしていたかなんですが、実は加藤登紀子のお父さんがしていたというんですね。加藤登紀子のお父さんというのは、実は芸能界では特にレコード関係とか、そういうなかでは裏方の仕事をしていた方なんですね。当時、歌手が地方公演に行くときには、業界用語で先乗りというらしいですが、その土地の親分筋にごあいさつしなければな

らなかったらしいんですが、加藤登紀子のお父さんはそれができたらしいんですね。ですから、ただ単に、歌手のお世話をするだけの人ではなかったと。ということは、もともと満州の特務機関にいた人でして、そんなこともあって当時はマーキュリーの社員として、そんなこともしていただいたということです。これは本当につい最近聞いたばっかりというか、ずっと温められていた話をうかがわせていただきました。加藤登紀子も東京大学を出て、ぽっと歌手になったというだけではなくて、そういう血筋を引いているんです。ああいう芸能界で生きる DNA を持っているということだと思います。

マーキュリーレコードはその後衰退していくわけですが、非常にレコード業界が厳しくなりました。野村雪子という人、実はマーキュリー時代は売れていたんですが、ビクターに 100 倍ぐらいの給料をオファーされて引き抜かれました。家 1 軒も東京に用意されていたらしいです。そんなことで、そのあとアメリカのマーキュリーレコードの販売権も契約が満了ということでできなくなったと。この契約はキングレコードが取ってしまいました。さらに藤島桓夫、松山恵子らが東芝レコードに引き抜かれました。同時に作詞家、作曲家もそれに付いていったんですね。実は、このあいだ藤島桓夫の昭和 28 年の契約書を見せてもらったんですが、要するに専属契約書ですが、月給 8 千円なんですよ。昭和 28 年の 8 千円がどうかということですが、はっきり言いまして、当時でも大卒の初任給とかのレベルがそんなもんです。今日たまたま昭和 33 年の方とお話していたなかで、昭和 33 年に住友系の会社に入った人が 1 万 3 千 800 円、見た通りの初任給だったと言われていましたから、藤島桓夫もやっぱり 100 倍ぐらいのお金で移ったということで、この会社もだんだん他社に有力歌手を引き抜かれてしまって致命的な打撃を受け、さらに昭和 35 年ぐらいには、休業状態に陥ったと。その後、工場の一部はインスタントラーメン工場になったりしながらつないでいきました。

皆さんの資料のなかで、ここに吉本興業うんぬんということを書いてありますが、そこはちょっと事実と違うらしいので、その部分はすみませんが、それ以下の吉本興業どうのこうのいうところは削除しておいていただきたいんです。吉本興業が関係したことは関係したんですが、ちょっと実態と違うらしいので、すみません、その部分だけ削除願います。ただ、マーキュリーも生き残りのためにいろいろやったなかで、インスタントラーメン工場にも貸したということが出ています。昭和 55 年、1980 年には、56 年の歴史に幕を閉じたということです。ちょっとこれは見にくいですが、マーキュリーレコードの横にマイ食品工業という名前が出ています。ここで一時ラーメンもつくっていたということです。

これが戦後の一番元気だったころです。昭和 28 年 1 月 1 日の新聞広告です。このなかにはタイヘイレコードとその下にマーキュリーレコードがありますが、まだこのあと正式にマーキュリーに名前を変えるということです。これが当時の航空写真

です。この右側のこの道が、いまの名神高速道路の料金所あたりになります。これは見えますか。これがそのときの新聞広告ですが、非常に面白いんです。一番左側の『泪のワルツ』は、パティ・ペイジの『テネシー・ワルツ』の続編なんです。ただ、これも会社としてはぱっと売れると思っていたんですが、あまり売れなかったということです。真ん中が、待望久しきソビエト音楽の数々と書いてありますね。ここにハチャトゥリアンの『剣の舞』だとか『瞑想曲』いろいろありますが、実はソ連の音楽公社というところと提携していたらしいんです。そういうことで、向こうから原盤をもらってここでプレスして売っていたわけです。一番右側は、瀬川英子のお父さんの瀬川伸ですが、ここで『酔いどれ浪人』とか『男けんか笠』ということで、左からアメリカ、ソ連、日本と並んでいます。アメリカとソ連が冷戦どうのこうのといわれていますが、ここでは並んでいるという面白い広告です。

先ほどちょっと言いました森光子ですが、国民栄誉賞、文化勲章をもらっていらっしゃる大俳優ですが、実はこの方はもともとは映画女優を目指していたけれども、なかなか売れなかった。そこで、歌手として立とうとして、当時の大スター松平晃に見出されて、京都の撮影所から西宮のスタジオに通っていました。レッスンを受けて昭和 16 年の春にデビュー曲を吹き込んだんです。しかしながら、そのあとデビュー盤が内務省の検閲に引っ掛かったと、その理由は何かというと、出征兵士を見送る別れを描いた部分が感傷的すぎるということで、結局、世に出なかったということです。森光子もせっかくなのでずっと持っていたらしいですね。しかしながら、それが割れてしまって、結局幻のレコードとどこにもなくなってしまったというお話でございます。

もう一つびっくりするような話がありまして、『南国土佐を後にして』という歌をご存知ですね。あれは、ペギー葉山の歌だとみんな思っていますけれども、実はそうじゃないんですね。あれは、ペギー葉山が昭和 34 年に NHK 高知の開局記念か何かで地元に呼ばれました。こんな歌があるんですが、歌ってくださいませんかと言ったら、嫌ですと言ったらしいですね。私の歌ではありませんと。私はジャズとかそういうものを歌っているので、こんな歌は歌えませんと言ったらしいんですが、無理に頼んで歌ったのが大ヒットしたというのが、この『南国土佐を後にして』なんです。これの 5 年前に今津で丘京子さんという高知の芸者さんが、同じ作者の同じ歌を吹き込んでいます。これはご当地ソングといいますか、高知近辺ではやっていたというだけです。これがその 5 年後、全国的に大ヒットしたというのがここで吹き込まれたということです。

だんだん時間も近づいてきました。あとはコマーシャルソングです。こういうものもやっていました。こういうものもどちらかというと、これはレコード会社が主に立ってやるのではなくて、例えば電通とか、そういう広告会社が企業と組んで、あの場所を貸スタジオ的なかたちで使わせてもらったということで、かねてつ（現

カネテツデリカフーズ株式会社）の「てっちゃん」もここで実はレコーディングされました。かねてつというのは、かまぼこのかねてつで有名ですが、発祥の地は西宮の染殿町です。西宮の東口に駅がありましたが、あれのちょっと南、川沿いに東川食料品市場がありましたが、あのへんで始まりました。そのあと住江町にも工場がありました。ということで、ちょっと「てっちゃん」の歌をお聞きいただきたいと思います。

（音楽）

これは松島トモ子さんが歌っていますね。ですから、松島トモ子さんは、先ほどの『鞍馬天狗』の杉作役で西宮北口に来ておられたんですね。それで、このマーキュリーでもレコーディングしていると。ちょっとそのときに、今津でやったのか東京のスタジオでやったのか、そこまではつかめていないんですが、いずれにしてもマーキュリーからこの歌が出ております。

（音楽）

この歌の作曲家の富田勲さんは本当に有名な方で、やはりこんな曲一つが皆さんの心にいつまでも残るというのは、やっぱりそれなりの音楽家がやっているんですよね。そういうことで、「てっちゃん」ですが、実は今年このキャラクターができて60年ということで、「てっちゃん」が還暦を迎えました。そういうことで、かねてつから還暦記念商品が出ているらしいので、ご注目いただきたいと思います。私のご紹介した今津にありましたメジャーレーベル、マーキュリーレコードが、これがクラシックもあったと、ジャズもあってこれもなくなった、演歌もなくなって、コマーシャルソングもなくなったと。そういうことで、今津を起点に音楽を全国に発信したところがあったわけです。

最後に、今日はお出でいただけませんでしたが、当時の最後の社長さん、代表取締役をされました福田昭三さんからメッセージをいただいていますので、これをお聞きいただいて、私、ご報告の最後とさせていただきます。ちょっとお聞きください。

（メッセージ）

福田：私は元日本マーキュリーレコードの福田です。今日はお忙しいところ、マーキュリーレコードの話をお聞きくださり、ありがとうございました。いまは何もなくなってしまいましたが、マーキュリーが制作した歌とともに、今津の地に全国に音楽を発信していた会社があったことを皆さまの心に留め置いていただければ幸甚です。ありがとうございました。

小西：ということで、私のお話を終わらせていただきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。それで、また続けさせてもらってよろしいでしょうか。

今回のこの講演会のテーマは『阪急電車』今津線大検定という名前だったんですが、最後になりましたが、いまから問題を皆さんの方にお渡しさせていただきたい

と思います。その前に、検定のルールをご紹介いたします。検定に通ったからといって、べつに就職に有利になるわけでもなんでもありませんし、お遊びみたいなものですが、内容は、河内厚郎氏の長年の阪神間文化の研究の成果といいますか、そういうものも含めてかなり高度なものになっています。文化的な香りが高い検定になっております。

いまから20問出題させていただきます。四択です。問題に対して四つの選択、A、B、C、Dのどれかに丸をしていただきます。１問に関して四つの選択肢を２回読ませていただきます。その代り聞き逃したからあとから戻るということはやりませんので、一生懸命聞いていただきたいと思います。これの合格点は、80パーセントですから16問以上を合格とさせていただきます。合格の方につきましては、『阪急電車』今津線大検定合格証というのをお贈りいたします。今回、合格は芦田愛菜さまということで、名子役の芦田さん、今回『阪急電車』にも出られましたが、彼女の名前になっております。これを授与する人は関西文学界代表河内厚郎さん、今津線大検定実行委員長ということです。ちなみに、ここの左側には西宮北口のダイヤモンドクロスを入れさせていただいております。80パーセント以上取られた方には全員差し上げます。さらに副賞といいますか、『阪急電車』は映画ができたばっかりで、まだDVDができていないんですが、特別に『栄光の車両たちと阪急100年』という10枚組のDVDがございまして、これをトップの方３人、仮に20点満点の方がおられた場合抽選と、あるいは19点でも、だからトップの方のなかから３人を抽選で選ばせていただきます。それが三つございます。あとは、阪急電車90周年に、阪急電車メジャーとかこういうものがありまして、これがたくさんあればいいのですが、これは１個だけなんです。市役所の方にうちがこういうものをもらったらしいんで、これもあった方がいいんじゃないかと思いまして用意させてもらいました。ですから、４人目の方はこれです。ちなみに、DVDは定価3,990円です。そういうものが副賞でございます。それでは検定に入っていきます。

第１問　水木しげるは、昭和28年から昭和32年まで今津に住んで紙芝居作家をしていましたが、何町に住んでいたのでしょうか。

A今津水波町　B今津山中町　C津門呉羽町　D今津二葉町

はい、どうぞ。先ほど申し上げるのを忘れましたが、これは合格なさった方は西宮文化振興財団のホームページにお名前を掲載させていただくこともできます。ただそんなの要りませんよという方は、要りませんというところにチェックしてください。問題と解答は、ホームページにも出ますので、そこでチェックしていただきたいと思います。

第２問　宝塚新芸座の看板女優時代、西宮北口の昭和町に住んだ女優は。先ほど答えを言っていらした方もおられましたが。

A寿美花代　B扇千景　C森光子　D島倉千代子

第３問　昭和 25 年、西宮北口駅の南側に完成した日芸会館では、能、文楽、歌舞伎などが上演されました。この年の 12 月、この会館で旗揚げ公演をした劇団はということです。

A 俳優座　B 民芸　C 文学座　D 関西芸術座

第４問　昭和 28 年宝塚映画撮影所が火災で全焼。西宮北口の仮設スタジオで撮影が続けられました。そのときの作品は。

A『旅はそよ風』　B『小早川家の秋』　C『沙羅の門』　D『桂春団冶』

これも先ほど答えがあったような気もします。これはちょっと難しいですね。

第５問　かつて西宮北口駅で神戸線と今津線が平面交差（ダイヤモンドクロス）していた時代がありました。今津線の南北分断でなくなりましたが、これはいつまであったでしょうか。これを渡るときはがたがたがたがたという感じで、何となく不安だったんですが。

A1978 年　B1980 年　C1982 年　D1984 年

第６問　阪急今津線沿線の小林にあるかつて通学用の電車があったというお嬢さま学校は。何か落とし穴があるかもわかりませんよ。なんか簡単そうですが。

A 小林聖心　B 仁川学院　C 聖和大学　D 宝塚音楽学校

ちなみに、昔はこの西宮北口駅でじいや、ばあやがこの電車に乗る人にお弁当を持って、いっぱいあのへんに来られていたということです。私のまた聞きですが。

第７問　西宮北口の西宮球場がホームグラウンドだった阪急ブレーブス、阪急ブレーブス時代のみですね。何回日本一になったでしょうか。難しいですね。

A５回　B６回　C３回　D２回

西宮球場は競輪もやっていたので、その都度あの中にバンクができて、グラウンドが傷むのでイレギュラーが起きやすいとかいわれていました。とはいっても意外と日本一にもなっていたんですね。すぐ宝塚の女優さんと仲良くなるから、球団が弱いんだとかいわれていましたが。そうでもなさそうですね、これを見ていたら。何回かいうのはあれですが。

第８問　門戸厄神にある神戸女学院の教授で宝塚音楽楽団の指揮者であったのは誰ですか。

A 貴志康一　B エマニエル・メッテル　C 朝比奈隆　D ヨセフ・ラスカ

難しいですね。

第９問　甲東園に住み、大関酒造のポスターを担当した美人画家として有名な日本画家は。

A 伊東深水　B 鏑木清方　C 寺島紫明　D 上村松園

第 10 問　「夕暮れには法華時の鐘がなる。と、それを合図のように、むこうの丘・聖心女子学院の白い建物から夕の祈りの鐘がこれに応ずるのである。少年ながらも、ぼくはこの二つの異なった宗教、東洋の鐘と西洋の鐘のひびきの違いを、なにか不

思議なもののように思いながら聞いたものだった」かつて住んだ仁川について、このように語った作家は。

A 遠藤周作　B 黒岩重吾　C 井上靖　D 野坂昭如

全員とも西宮にゆかりの作家です。次にまいります。

第 11 問　西宮市に本拠地を置いていた二つの球団、阪急ブレーブス（本拠地・阪急西宮球場）と阪神タイガース（本拠地・阪神甲子園球場）が日本シリーズで戦ったという、実際には起こらなかった『決戦・日本シリーズ』を書いた SF 作家は。

A かんべむさし　B 小松左京　C 筒井康隆　D 堀晃

この 4 人ですね。このうち誰でしょう。これは幻の今津線シリーズとも言われていました。結局、実現しないままで終わってしまいましたが。

第 12 問　西宮北口に住み、阪神大震災で亡くなった。2004 年には高木公園に作品のレプリカがモニュメントとして設置された抽象画家は。

A 吉原治良　B 白髪一雄　C 津高和一　D 須田剋太

第 13 問　次の歌手のなかで、タイヘイレコード時代を入れて、マーキュリーレコードに所属していなかったのは誰ですか。これも先ほど答えがありましたが。

A 西田佐知子　B 藤島桓夫　C 春日八郎　D 松山恵子

第 14 問　小説『阪急電車』で、「いい駅」と言われツバメの巣があるのはどこの駅か。これは小説なり映画を見ていなかったら絶対に答えられない問題ですが、見た人は絶対分かるという。

A 仁川　B 甲東園　C 小林　D 逆瀬川

次もやはり小説とからみます。

第 15 問　小説『阪急電車』で、登場人物が乗る電車が武庫川鉄橋を通過するとき、河原に生きるの「生」の字のオブジェを見つけるが、その位置はどこかと。

A 鉄橋から 500 メートル上流　B 鉄橋からすぐの上流　C 鉄橋からすぐの下流　D 鉄橋から 500 メートル下流

これは残念ながら、映画を見た人、劇場映画を見た人はこの問題は分からないですね。小説を読んだ人は分かるはずですけれども。ただし、これのスピンアウトの映画があって、テレビで放送されたらしいですが、これをご覧になった方はありますか。ご覧になった方はお分かりだと思います。ちょっと難しかったですかね。

第 16 問　仁川駅はどこにあるか。

A 西宮市　B 宝塚市　C 西宮市と宝塚市両方にある　D 尼崎市の飛び地

第 17 問　小説『阪急電車』で宝塚行きの電車が甲東園を出たあと、登場人物が線路の切通しに見つけたものは何か。

A ワラビの枯草　B ユキノシタの枯草　C ススキの枯草　D ノビルの枯草　、

第 18 問　小説『阪急電車』で、翔子はその後、今津線のある駅に引っ越したがその駅はどこか。なんとなくこれは先ほどから非常によく出てきている駅です。

A 阪神国道　B 門戸厄神　C 逆瀬川　D 小林

この映画で一挙に有名になるんじゃないかという駅です。

第 19 問　阪神国道駅と交差する国道 2 号線には、以前、阪神電気鉄道運営の路面電車が走っており、阪急電車阪神国道駅の下に駅がありました。その路面電車の駅の名前は。

A 阪神国道　B アサヒビール前　C 北今津　D 津門川

最後の問題いきます。

第 20 問　甲東園には日本・中国等の古美術品　なかでも室町水墨画の貴重な資料や写生画・文人画（南画）の近世絵画の優品が中心に収蔵する美術館があるがその名前は。

A 頴川美術館　B 甲東美術館　C 江川ミュージアム　D 芝川美術館

以上 20 問でございました。そういうことで非常にかなり難しかったと思いますが、用意した商品が出ないほど少ない場合は、げたを履かせていただくということもございますので、結果をお出しいただけたらと思います。『阪急沿線』今津線大検定をこのへんで終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

（終了）